

黒鷲城の時代

「平成の修理」中の姫路城大天守ですが、修理工事用の素屋根がとれてみると、中から真っ白な大天守が姿を現しました。ネットで「白すぎ城」と話題になりましたが、なるほど太陽光の加減によっては、大天守が光り輝くその容姿は「白過ぎ」です。昭和の大修理直後でも、これほど白さを感じなかったという人もいますようです。もっとも白さの客観的な基準があるわけではないので、あくまでも主観ではあります。いずれにせよ、白漆喰が汚れてくれば「白過ぎ」と言われることもないわけですから、これだけ白い姿を見ることのできるのは今のうちということにはなるでしょう。

そんな姫路城でも、その白さが厄介視された時期がありました。すでにマスコミで採り上げられ、周知のことではありますが、それは第二次世界大戦時に、日本本土に対する直接的な攻撃が危惧されるようになったからです。とくに姫路は旧城下および近郊に陸軍第十師団(十師団移駐後は第五四師団)が駐屯する“軍都”であり、かつ市街地には軍需工場、そして海岸部(旧飾磨市)には日本製鉄広畑製鉄所があり、さらに山陽本線を軸として姫新線や播但線も分岐する鉄道の要衝でもありました。敵の攻撃対象になることは、誰の目にも明らかだったのです。

姫路市と陸軍、兵庫県は、昭和15(1940)年の第三次防空訓練において灯火管制を視察した結果、姫路に対する攻撃を想定した場合、大天守を擬装する必要のあることが認識されました。軍事施設だけではなく、市街地に住む多くの住民の命をも危険に曝す恐れがあったからです(橋本政次『姫路城史』下、名著出版復刻、1973。以下、同書による)。

そこで姫路市は、白い外壁面をペンキで塗る案を文部省に打診したのですが許可が出ず、文部省の設計による擬装網案を採用することになりました。昭和16年9月には試験的に藁縄製の擬装網が大天守五層目に懸けられました。結果、陸軍からの申出もあって、擬装網案が採用されることになり、昭和17年5月までに大天守の擬装が完了しました。

ところが、大天守の擬装ができてみると、皮肉なことに周囲の建物の白さが目立つということが判明しました。端緒となった昭和15年の防空訓練では地上からの視察でしたが、すでに日米開戦となり日本本土に対する攻撃の可能性が現実味を帯びてきたいま、空中からの視察でもあったからなのでしょう。目立つその他の建物群についても、壁面だけではなく屋根目地漆喰にまで擬装をすることになったのです。そして昭和18年



第十師団司令部と姫路城 (絵葉書：裏焼を反転)



写真1 天守群の西面 (絵葉書)

7月、一部の屋根目地を灰汁で古色塗装し、12月には擬装網の懸架が完了しました。

当時の擬装網の懸かった城を絵葉書で見ると、天守群の西面で、大天守、西小天守、ハの渡櫓に擬装網が懸けられている様子がよくわかります(写真1)。網は軒下や方杖の直下に折釘を打ち(写真4参照)、そこに懸けられました。写真1は、手前のはノ門や土塀に擬装はなく、屋根目地も白いままなので昭和17年5月からそれほど時間の経過していない頃とみられます。

このときの擬装は、建物の北面に施されることはありませんでした。写真2でそのことがわかります。天守四・五層目の西面に網が写っていますが、北面にはありません。これは、南からの敵の攻撃を想定していたためで、実際、昭和20年の姫路空襲では播磨灘からB29が侵入し、市街地は6月と7月の2度の爆撃で焼け野原となりました。

1度目は川西航空機の工場への精密爆撃でした。アメリカ軍は事前にB29で爆撃目標の写真偵察を行い(工藤洋三『米軍の写真偵察と日本空襲』2011)、昼間に工場への爆撃が遂行されました(精密爆撃は昼間でないとできない)。一方、2度目の空襲はレーダー照準を使った焼夷弾による夜間爆撃でした。日本軍には夜間飛べる迎撃機がほとんどなく、また市民に対する恐怖心を煽り、消火活動を難しくして被害を拡大させる意図から夜間に「テロ爆撃」(荒井信一『空爆の歴史』岩波書店、2008)が行われました。つまり、夜間に低精度なレーダー照準で爆撃目標に誤差が生じても、無差別爆撃なので地域一帯が焦土になればよかったです。そこに姫路城があるとかないとかは、全く関係がなかったのです。

結果的に擬装網は市民を救うことにはなりませんでしたが、しかし、終戦直後の9月には網が外されて、「白鷲」の姿が復活しました。もしもペンキで黒灰色に塗られていたら、「白鷲」の復活はもっと遅れたことでしょう。「白鷲城」が人びとの眼にもっとも白く映っていたのは今ではなくて、擬装網がはずされたその時だったのではないのでしょうか。



写真2 天守群北面 (絵葉書の部分)



写真3 鷲城中学からみた天守群 (絵葉書)

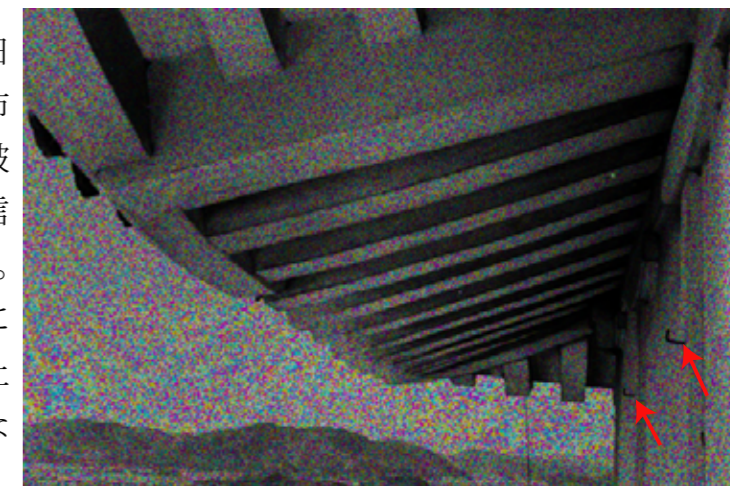


写真4 大天守五層目西面に残っていた折釘 (「昭和の大修理」で撤去)

(掲載した絵葉書は福井孝幹氏の所蔵)